

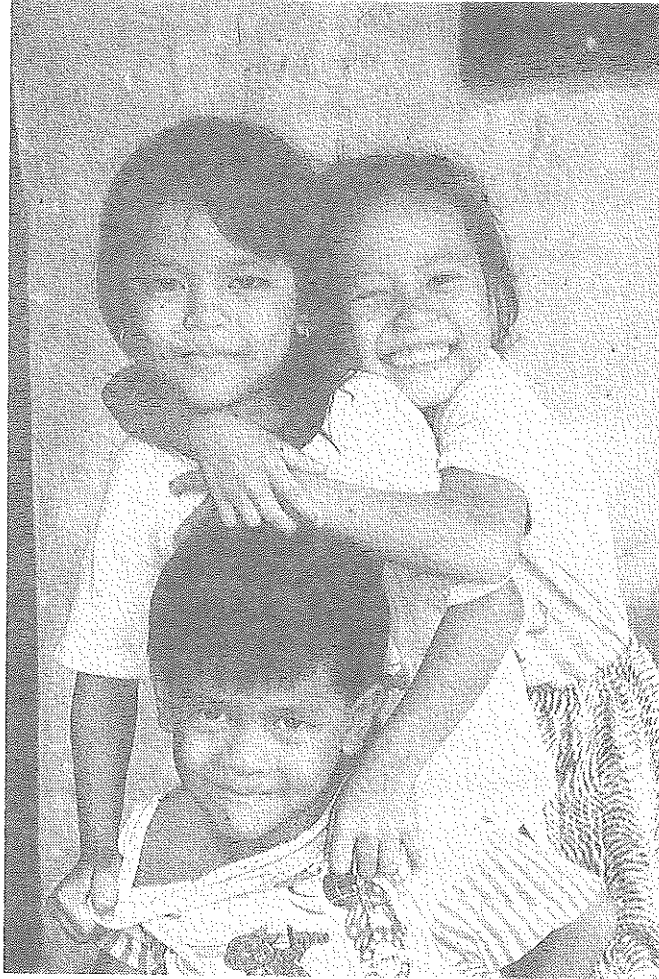
Save The Tropical Forests

アース

森の通信

42

1996.12.25



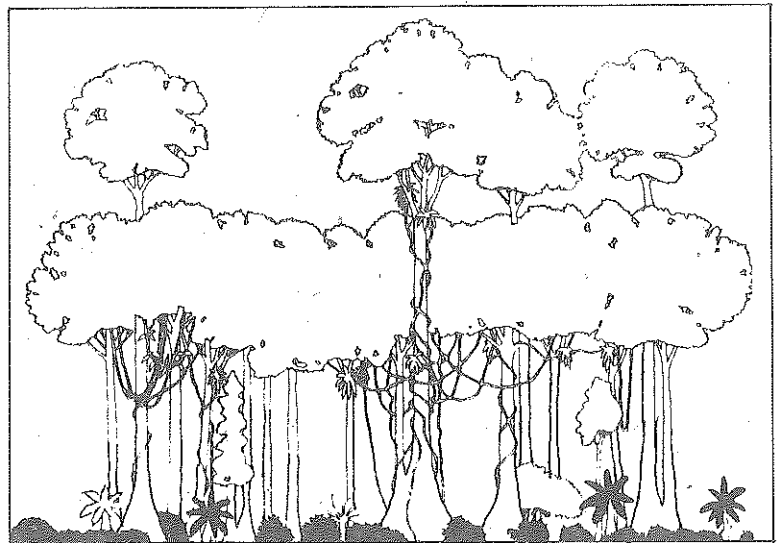
Hutan

CONTENTS

- ◇ 「おそろいで!!だからウータン止められへん!!」～10年目の繰り言 3
ウータン事務局長・西岡良夫
- ◇ 11.17 関西熱帯木材削減委員会 中間報告会 レポート 4
- ◇ 熱帯林講座 ① 井上 真 「先住民のゆくえ」 6
inとよなか
- ② 峠 隆一 「ヤシは地球にやさしいか?」 7
- ◇ 新連載「カナダの森林地帯と先住民の村を訪ねて」 8
JATAN・黒田洋一
- ◇ 持続可能な森林経営国際会議の問題桌を探る 10
猪俣栄一
- ◇ 山ガラの便り「熊野から」[冬編] 14
中村義明
- ◇ 7くりまの家の家具のお話 [そのろ] 18
永田健一
- ◇ Book紹介・活動報告 19

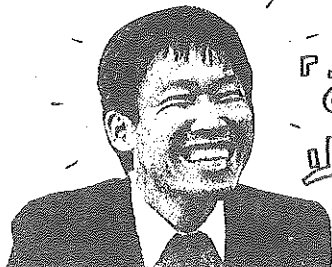
- ◇ ウータンスケジュール
お便り紹介

20



● 3人の子供

上左の女の子と下の男の子は双子である。母親のオボンさんは六人目までずっと男の子を出産してきた。これが最後と決めた七回目の出産でも男の子。と思いきやもう一人いた。待望の女の子だった。子供は合計八人となったが、オボンさんには子育ての苦労は全くない。村人全員が育ての親であり、村の子供たちが兄弟だからだ。子供たちは健やかだ。



1997

「おもしろいで!! だからウータン止められへん!」 ~10年目の繰り言



◎西岡 良夫 [ウータン・事務局長]

早いもんや、来年6月でウータンも10年目になる。少ないメンバーでようやくってきたけど、今も問題はいっぱい。それでもウータン!

* * * * *

[その①]【方針と現状把握・計画・実行編】

88年6月から『熱帯林問題講演会』を始め、89年には『暮らしを考える学習会』を催した。90年にサラワクの先住民が来日して、大阪でも商社に「熱帯木材輸入一時停止の申入れ」もしたが、うまく行かんかった。

90年末から、私たちは自治体へ熱帯材使用削減の申入れを行なった。熱帯材の削減が進まなかったの、サン・フランシスコ市長に頼んだ。突然、92年に姉妹都市大阪市が削減。大阪府、堺市、豊中市も使用削減する。その年6月にリオ・サミットもあり、熱帯林保護の意識が高くなった。それから「隣の自治体はどうでつか」と問い合わせがあり、熱帯材使用削減をする自治体がどんどん増えた。今じゃ、30自治体が熱帯材使用削減。自治体キャンペーン、面白いで。やってみいへん?

* * * * *

[その②]【実施と疲労回復編】

ウータンでは93年から『熱帯林連続講座』をもち、事務局メンバーや会員を増やそうとした。その間も自治体に削減を求める「自治体キャンペーン」を並行してたので、新しい事務局メンバーがなかなか増えへん。求む事務局メンバー!今変わったウータンは面白い!ウータン事務局に来たら疲れ飛びまっせ!!

* * * * *

[その③]【実施は分析、熱意、実行力編】

私が1970年頃、「①このままでは公害・環境破壊が広がる、②人口爆発が続く、③工業・農林業の格差拡大都市化する」等と言いつらした。それを点検し、記録することをしてたら良かったと悔いが残るんや。それがどんどん本当になった。環境監査方法のフロー

の考えがあれば違た。あの頃余り聞いてくれへんから、沖縄へ農業しに逃亡しましたんや。

『ウータン』へ連載してくれてる猪俣さんみたいに、実施は分析、記録、説得力と熱意が必要。ひっこくやらなあ..あかんのや。

* * * * *

[その④]【監査編】

今まで人間は、自然を傷め痛め尽くしてきた。食糧生産のため、森を壊し、畑にし、そして家をどんどん造った。外材輸入し、食糧も大きく輸入。今は国産材がぜんぜん売れへん。食料自給率もガタ落ちや。このままでは21世紀初めにも食糧不足になる。

サラワク先住民は「なぜ日本に森があるの」と言う。「日本の人は自分とこがなくならん限り、分かれへん。」と答える。人様の首を締めるなら、日本の森を切り尽くしてみた方がええ。根本問題は使用量を減らさなあ。絶望的? 絶望すんやったら気楽に来えへん。

* * * * *

[その⑤]【再度、計画見直し編】

絶望せえへん。こらええわ。わしらと一緒に考えてや!

熱帯材使用削減したけど、ロシアの原生林伐採しての針葉樹合板等がどんどん増えてる。なんぼ熱帯材の使用削減がされても、生えへん木を切って、代替にするんやったらあかん。今年は国産材の見直しの年でっせ。絶望してへん人、チエをかしてくれまへんか。

* * * * *

[その⑥]【再度、実施編】

自治体が熱帯材削減するけど、破壊の進行の方が早い。「まだ熱帯林保護になってない」と言われる方。「確かにそうです」ねん。だから、あなたの力お待ちしてまっせえ。

①に方針、②現状把握、③目標と計画、④実施マニュアル化、⑤熱意と記録、⑥に監査、⑦は見直し、⑧再度・実施が必要だっせ。



1996 関西熱帯木材使用削減委員会中間報告会

森にやさしい暮らしを考える

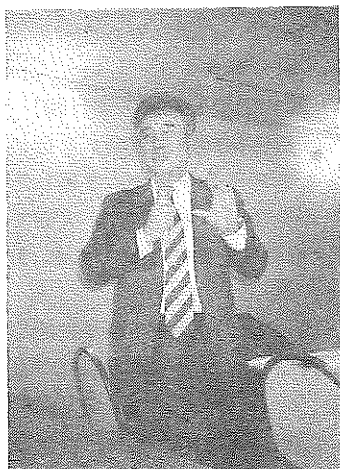
——都市をもう一つの森に——

Save The Tropical Forests

◆ 西岡良夫

■ 11月17日、関西熱帯木材使用削減委員会の中間報告会『森にやさしい暮らしを考える』集会在京都で開催された。

最初に、東京大学・有馬孝禮教授の『地球環境時代における木の住まいづくり』の基調講演の後、自治体部会から南さん（京都）と私、家具部会から奥村、篠宮、荒木さんが報告し、建築家の武内喜久さんが圧密材についてコメントした。また、住宅部会からは伊東（京都）、橋本（京都）さんが報告をした。



▲ 有馬孝禮氏[東大農学部助教授]

《関西の回答8割、熱帯材削減自治体60》

関西自治体の『熱帯木材使用削減等に関するアンケート』結果を南さんが評価等を報告。

「依頼した246自治体のうち197自治体が回答し、回収率は8割と非常に高い。」

【Q1】の公共工事の熱帯材削減は、大阪府下では29自治体、7割を越えるが、他府県自治体では17%、検討中を含めて22%と低い。

【Q2】の削減の具体的内容は、複合・針葉樹合板、鋼製型枠やPC工法などで一部で地元産杉板合板使用もされている。だが、部局間連絡会議は17%と少ない。

【Q3、4】の今後の削減計画と内容は、検討している自治体が非常に少ない。

【Q5】の熱帯材使用数量把握は、ほとんどの自治体がしていない。

【Q6、7】の住民への啓発、企業への啓発は、10%前後と低い。

【Q8】地元産材使用建築への支援の融資制度は、大阪府、和歌山県はない。

【Q9】国産学校用家具の導入の自治体は、僅かだ、コスト面等のみ着目している。

【Q10】家具・廃材再利用の取組みは僅かだ。

◆各部会からの報告 1. 自治体キャンペーン部会



《全国の削減自治体は現在144に》

私が『全国アンケート』中間報告をした。
発送81で、56自治体が回答。回答率7割。
熱帯林週間後で各グループ集計前だったが..。

【Q1】熱帯材削減と答えた自治体は、都道府県、
県庁所在地・政令指定都市で34、その県
下自治体で22、熱帯林保護グループ調査
での判明が28で、関西を合わせ計144。

【Q2】削減の具体的取組みは、複合・針葉樹
合板、鋼製型枠中心に代替。国産材合板の
使用は11自治体あるが、削減目標有無の
問いではほとんどが無しであった。

【Q3】今後削減検討は7自治体。

【Q4】熱帯材使用把握は、約1/3である。

【Q5】熱帯林保護の啓発は、削減している自
治体がしていることが多い。

【Q7】県下自治体に働きかけている都道府県は、
8自治体と少ない。

【Q9】削減している自治体で産地、樹種把握
は、5自治体のみ。

【Q10】地元産材使用建築への融資は、19自
治体もあり、方法は様々だ。

【Q13、14】環境基本計画策定は、11自治体
が行い、策定中がほとんどだ。

《国産材学校家具、家具リサイクルの取組み》

国産材の学校家具を使っている自治体や、
「ごみ」として出された家具リサイクル等を実
施している自治体へのヒアリングの報告が、
荒木、篠宮さんからされた。

「関西の自治体から国産材学校家具の使用
していると回答があったところに、電話でヒ
アリングした。ところが、実際に実施してい
る自治体は回答より少ない。一部林業地では、
林業活性化等で使用している自治体がある。

全体的に見て、コスト面や耐久性を重視し
ており、今後環境教育の問題や熱帯材使用削
減等をもたらすことをPRする必要がある。」
と荒木さんが報告した。

Ⅱ. 家具部会



続いて、篠宮さんが家具の再利用について
報告。

「自治体では、大阪の北摂地域中心に取組
んでいるが、全般的に啓発のほうに重点をお
いている。環境フェア等で市民に提供してい
る。ネックは、ストック・ヤードと修理・運
搬などの人員配置の困難さではないか。」と
述べた。

そして奥村さんが《私たちに出来ること》
を提案した。

「例えば、①自分のすんでいる自治体の家
具リサイクル現状をチェック、②既存システ
ムを利用して使い易さを調べる、③自治体に
利用出来る家具を提供する取組みをしてほし
いと頼んでみる。

またリサイクル・ショップを調べ、多くの
人に知らせたりする。などいろんなことが考
えられる」と。

その後、ゲストとして建築家の武内さんが
京都府内産杉材の活用を目指して、圧密材の
家具、建築物の報告。

《国産材使用の住宅と産直》

住宅部会の伊東さん、橋本さんが報告。

「国産材の新築は、阪神大震災から減り、
ツーバイフォー工法の外材が急増。一方国産
材の産直化の取組みもあるが、流通、価格、
人員の問題がまだまだだ」と。

詳細は、関西熱帯木材使用削減委員会まで

11月10日(日) 午後2時～5時

「先住民のゆくえ………焼き畑と熱帯林」

◆講師 井上 真氏 [東京大学助教授 農学生命科学研究科林政学研究室]
著書「熱帯雨林の生活ボルネオの焼畑民とともに」農地書院
「焼畑と熱帯林」弘文堂

1987年～89年インドネシアの東カリマンタンにて「熱帯雨林研究プロジェクト」に参加。
85年同地を再訪、カリマンタンの伝統的焼畑システムの変容を研究。

井上真さんは、毎年インドネシアへ行く。
カリマンタン、スラウェシ、西チモール
など、各地でフィールドワークを重ねて、
14年になる。熱帯林にくらす人々とじっ
くりつきあい、焼畑を研究してきた。

きっかけは、「熱帯林の消失は焼畑のせい」と、木材取引の正当化がおこなわれたためだ。「本当のところは？」と研究を始めた。

朝日新聞(92.7.20)『論壇』に「熱帯林保全に求められる視点」として述べた結論を要約すると…

「林道がつくられて、木がきりだされる。その林道をとおって人がはいり込み、残った木を持ち出す。そこを焼いて陸稲を植え、その跡に商品作物のコショウを植える『非伝統的焼畑』が行われる。すると森は『緑の砂漠』といわれる草原になる」

つまり、「最終的に『非伝統的焼畑』で失われた森林」であっても、その火付け役としての商業伐採の責任は大きい。

(一方、先住民が先祖代々続けてきた『伝統的焼畑』は森と調和したものだが、経済や社会環境の変化につれて、変わりつつある)

「人々がそこで生活していることを前提とした森林保全策、を市民、企業、政府のすべてが模索すること」と井上さんは結んでいる。

* * * * *

今回の講座では、「わたしたちの隣人」として現地の人々を知ってもらうため、熱

帯林の人々の暮らしや、日本と縁のある林産物を中心にはなしていただきました。

まず、実態を知るためのフィールドワークの心得。

「生ガキの好きなAさんと、焼いたカキの好きなBさんが出会う。その時、三つの態度がある。

相手を馬鹿にする。／『そういう人もいる』と、異質のものとして認める。／

ちがいを認め、その上で相手と一緒に互いの認識法を分析する。Aは舌ざわりを、Bは味の濃さを重視するという様に。

最後の態度が必要です」

次に、プロレスの「冗がため」を実演。それをどのように記述するか、例をあげて説明した後、スライドを用いて先住民の暮らしを丁寧に説明。

最後に「私にできること」として、学者・行政・市民など、さまざまな人のアクションの仕方を示されました。

* * * * *

【参加者の声】

*もっと声高に「これが問題だ！」と言われるかと思ったが、よかった。

*教師をしているが、環境問題を子供たちにどう伝え、生活に取り込むか。フェアトレードに興味がある。

*昔は器ひとつでも大切に扱っていた。あるから安いものが出回り出した。多分熱帯からのものだろう。現地の人が潤えばよいと思っていたが…。くらしを見直す必要がある。

*インドネシアに日本が原発を売り込んでいる。それにかわるものとして太陽電池を送ろうと運動している。

*マスコミで働いている。今後環境問題をテーマにしたものをつくりたい。

◆この講座は『とよなか国際交流協会』の助成・後援を受けて、「とよなか国際交流センター」で、96年11月・12月に3回行ったものです。

報告集をだす予定ですので、ご希望の方は井下(☎06-841-8221夜間まで)

ヤシは地球に優しいか? ~伐採はまだまだ!



◎ 峠 隆一氏 [環境ライター]

マレーシアのサラワク先住民に魅せられて、のべ一年間生活を共にし、
現地を調査 サラワクへのスタディ・ツアーも主催してきた。

私たちは使う、買う、食べる。植物性石鹸
やシャンプーを、インスタントラーメンやス
ナック菓子を、冷凍食品を、レトルト食品を、
マーガリンを、レストランでの外食を。

ただ、どんな時にも人間が人間として正し
く歩む道を模索する人々はある。その一例を
紹介してペンを置きたい。

■ サラワクの熱帯林伐採は、どうやら底をつ
くところまで来たようだ。プラン人の必死の
道路封鎖など、昔話として語り継がれていく
のだろう。サラワクでの「生産」される丸太
の半分を日本人が使うのに。そして、もう一
つの問題。

「伐採はまだまだ!」

なぜ、このサラワク先住民の声は私たちの
心まで届かないのだろう。

「油ヤシ・プランテーション。この問題を
機会あるごとに訴えてきた。だが、「大変だ
ね!」の感想をもたれるだけで、いまだどの
市民団体も具体的に問題に取り組まない。余
力がないのか、やる気がないのか、なぜなの
か。

ただ一つの事実は、数年前の熱帯林伐採報
道には、実に多くの市民が関心を寄せてくれ
たということだ。もう一つの事実は、プラン
テーションはその伐採よりもひどいというこ
とだ。関心を寄せない理由はどこにもない。

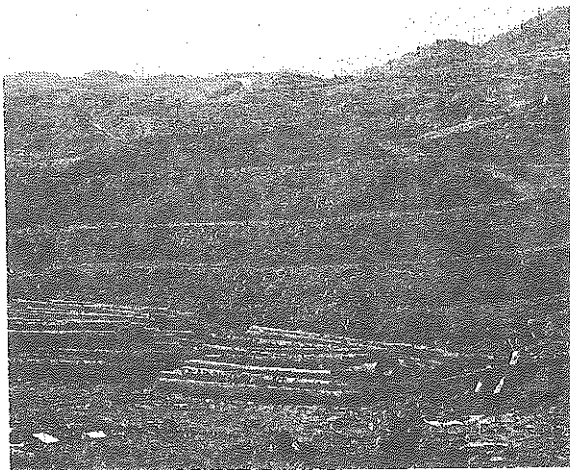
伐採ならば、10年間で太い木を切り尽く
せば、企業はそこを去る。プランテーション
は太い木を含め、最低3000haをも丸裸
にし、半永久的にそこに留まる。数億年も続
いた熱帯林はその歴史の幕を下ろす。

*天竜ウッドワーカー—天竜市のヒノキ間伐
材だけを使い学童家具を作り続ける。「熱
帯林伐採反対という前に、自分の土地で動
くことじゃ!」(☎0539-28-0950梅林さん)

* (株)M&K—細く曲がった間伐材でもフ
レック状にカットし、セラミックと混入す
ることで使い捨てしないコンパネを開発。
「儲けより、大切なのは思想です。」
(☎03-3237-7587)

*三共油脂—同じヤシでも、環境負荷の少
ないココヤシから手作業で天然石鹸を製造。
皿洗い、洗濯、シャンプー、石鹸と万能で
バカ安! (☎0594-22-0718)

*食生活研究会—紅茶にいたるまで国産に
こだわる市民団体。単なる産直でなく、会
員に年数回の農作業が義務付けられている。
油も国産のみを販売。(☎0466-22-0635)



カナダの森林地帯と先住民の村を訪ねて

◆黒田洋一(熱帯林行動ネットワーク事務局長)

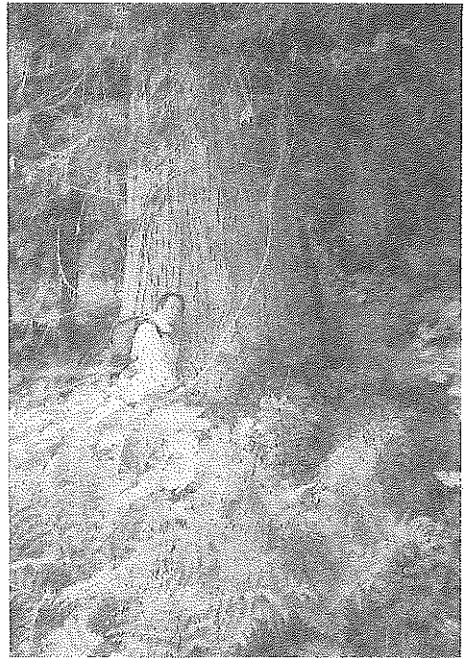
はじめてのウータンへの寄稿で、しかも熱帯林ではなく、北米の森林で初登場とは意外に思われるかも知れませんが、私にとってはこれが4回目のカナダへの訪問です。

1992年以降、世界の森林問題の論争が熱帯林から「すべての森林」に移行したこと、日本の林業問題は北米材抜きには考えられないこと、などがその理由です。実はカナダは世界最大の木材製品輸出国であり、80年代後半以降に欧州でカナダ批判が巻き起こって以来、国際会議などでカナダ政府は大変なプロパガンダを行っています。

今回、9月初旬から1か月半、主としてブリティッシュ・コロンビア(以下BCと略)州の内陸部に滞在し、その間ミッド・コースト(太平洋岸中部)の熊の保護区ツアーやマニトバ州に出かけ、多くの州の活動家や先住民と出会いました。

BC州は、世界の針葉樹製材輸出の3割を占めるほどの木材生産地域で、バンクーバー島などの沿岸の温帯雨林地域には米ツガ、米マツなどの巨木の原生林が残されているため、その激しい皆伐に対して世界の注目が集まりました。それに比べ同州内陸部は森林のタイプが異なり、スプルース、パイン、ファーのやや細い木が多く、伐採は沿岸部以上に進んでいます。その実態はあまり知られていません。

私が滞在したスローキャン渓谷のニューデンバー村では、すぐ目の前に見えるアイダホ山の中腹にあるニューデンバー・フラットと呼ばれる水源林地帯が伐採されるといわれて、大騒ぎになっていました。お世話になったコリーさんは、この地域に多くの保護地帯をつくった有名な活動家で、もう数か月にわたって道路封鎖の準備中で、事務所はまるで戦



▲ シンキングフォレストの巨木の前で

場のような様子でした。彼女と友人のディビッドさん(先住民文化の研究家)と、この水源林地帯を松茸狩りをしながら歩き、後で特製松茸ご飯とスープを御馳走しました。ニューデンバーには、戦時中日本人移民の強制収容所があり、日系人も多く住んでいるので、米、味噌、はなかつおなど日本食の材料には事欠きません。私の覚えたての料理は評判になり、コリーさんの妹さんからいっしょにレストランを出そうとお誘いを受けました。

さらに山を越えたクーデニー地域では、残された原生林地帯である「シンキング・フォレスト(歌う森林)」を訪ねました。周辺の多くが伐採され、ここは貴重な原生林地帯ですが、安宅木材と大阪のタキイ産業の子会社メドークリーク・シダー社が伐採権を取得し、保護派住民と対立しています。



▲ 皆伐されたシンキング・フォレスト（針葉樹混交林でウェスタンレッドシダーが主）

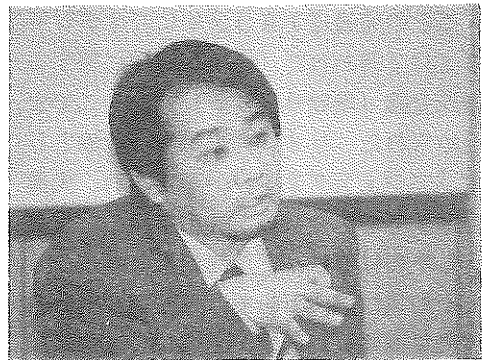
森林から最も近い村アジェンダの公民館に着くと、多くの村人が集まっており、そこでスピーチをした後で、村人といっしょに50km離れた森に向かいました。そこは直径1m以上、樹齢数百年以上あるレッド・シダー（カナダ杉）を中心としたヘムロック、スプルース、ダグラス・ファー、パインなど多くの樹種が共存する荘厳で、見事な森林でした。同社が製材するのはシダーだけで、他は別の製材所やパルプ工場に売り飛ばしています。製材工場で小さな板材に加工され、日本でさらに「障子の棧」に再加工されます。

わずかな救いは、カナダ国内の反対運動や地球の友とJATANの反対のために、住民が最も保護を希望している地域だけは、当面伐採の対象からはずしているとのことでした。これらの地域には、クロクマやグロズリーなどが生息し、また地元の人々から「スピリット・ベアー」と呼ばれる白いグロズリーもいて、大きな保護区も近くに作られようとしています。

皆伐が進んでいる上に保護運動が活発化して資源確保が容易でなくなった内陸部のパルプ産業は、隣のアルバータ州やユーコン州、さらにサスカチュワンなどに進出しつつあります。これが三菱と本州製紙の現地会社クレストブルックが、アルバータで600万haの森林管理権を取得し、巨大なALPAC社をつくる動機となったのです。



クレストブルックは1967年に輸銀の支援（当時の額で37億円）を受けて設立されましたが、スクークムチェックにあるこの工場は大規模な皆伐もさることながら、政府の報告書で汚染のワースト記録を指摘されています。



◎ 黒田洋一（くろだ よういち）

1987年1月、JATAN設立。11年目を迎える。目立つ風貌と得意のロビー活動、幅広い環境問題の知識で内外のNGOに知られる。ゴールドマン賞受賞後も各地を飛び廻る。帝京大学講師。氏らの働きかけで、サンフランシスコ市長が大阪市長に「熱帯材削減質問」を送付し、大阪市も削減。

【 持続可能な森林経営国際会議の 問題点を探る 】

◎ 猪俣栄一 【いのまたえいち・徳島熱帯林問題研究所所長】

◆はじめに

この会議は去る11月21日から5日間、高知県芸西村のリゾートホテルを借り切って行なわれた。会議の日程と、国内の熱帯林関係団体の機関誌の発行日との関係から、このウータンの記事がおそらく時期的に最も早い報告になるだろう。

本来このスペースには、私が書いていた連載を終わるにあたっての一文が掲載される予定であったのだが、丁度タイミングがよかったので、編集者との話し合いの結果、急に差し替えて、会員の皆様に会議の模様をお伝えすることになったものである。

◆会議の名称と開催の経緯

会議の正式名称は「持続可能な森林経営の総合的な実践に関するワークショップ」。このワークショップがこの時期に開かれた背景について触れておきたい。

この発端は1992年にリオデジャネイロで開かれた「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」。そこでまとめられた「リオ宣言」の実行計画として「アジェンダ21」が策定され、先進各国がその必要資金を拠出することを公表したのは皆さんご承知のとおり。そしてその実行機関として「CSD」（持続可能な開発委員会）がFAOの中に組織され、計画の実施が図られた。

一方このサミットでは、急激な熱帯林の減少に少しでも歯止めをかけようと、

「森林条約」なるものを採択する予定であった。ところがインドネシア、サバ、サラワク、PNG及びこれらの国から根

廻しを受けた一部のアフリカの森林資源国等の強い反対にあって、この目論見は外れ、単に森林条項なるものを採択したにとどまってしまった。

そういう経緯から、アジェンダ21計画のうち、森林関係の取り組みがおくれ、昨年4月に開催されたCSDの会議でそのことが指摘された。それで早急に取り組みを推進する目的でCSDの下部組織としてIPF（森林に関する政府間パネル）が設置された。今回のワークショップは、そのIPFが来年2月にCSDに提出する取り組みについての報告を成文化する目的で開かれたものであり、その内容は来年6月に開催される国連特別総会でCSDから報告される。

総会で採択されれば、加盟各国に対し、国内法整備等が勧告されることになるだろう。

◆環境NGOも参加

会議はカナダ、日本、マレーシア、メキシコの4ヶ国政府及びFAO（国連食糧農業機関）、ITTO（国際熱帯木材機関）の合同主催で開かれ、世界54ヶ国と7つの国際機関から、150名余りの土地利用や森林管理の実務担当者、専門家、研究者等が出席した。

そのほかに世界の森林関係のNGO 10団体の公式参加が認められ、日本には2団体分が割り当てられて、私とJATANの黒田洋一君が出席した。

会議は毎日午前中に全体会議が、午後2組に分かれてサブセッションが開かれたが、我々NGOはどの分野にも公式

メンバーとして自由に参加でき、かつ全く自由に発言できた。しかし発言内容の記録への取り上げ方やその他の取り扱い方は、政府関係者の発言に較べて明らかに差別があったと言える。

◆「住民参加」の新しい流れ

この会議には前もって4つのテーマが設定されていた。①維持可能な森林計画の枠組みの問題、②地元関係者の参加の問題、③ノウハウの集積及びその活用、④人的、財政的基盤整備の問題、の4項目である。

これらのテーマに沿って、モデルフォレストの管理・経営に関する14本のケーススタディの発表と、テーマ討議が行なわれたのであるが、全日程を通じて最も印象的だったことは、テーマのうち「参加」の問題をめぐる白熱的討議であった。

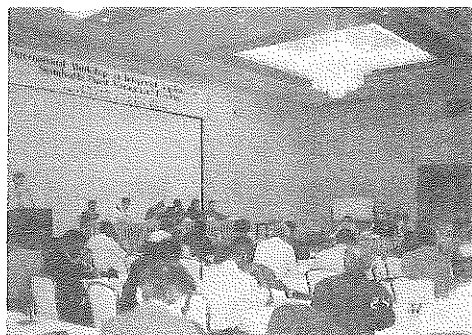
「参加」とは、国土や森林の利用計画の立案から実施までの各ステップにおいて、関係住民に対して全き参加を求めて行こうということなのであるが、林業先進国、途上国を問わず、発言者の殆ど全員が口を揃えて参加の必要性を強調していた。

そしてこの傾向は初日のサブセッションで行なわれたケーススタディの報告から現われはじめ、その後のサブセッションや全体会議での一般討論においても、出てくる話の殆どが参加を重要視する論調であった。

そこに至って、私としても、住民参加ということが世界各地でここまで重要視されはじめていたのかと、認識を新たにしましたが、同時に奇異な感にも捉われた。

というのは、サラワク、カリマンタン、

PNG、タイ東北部、ブラジルその他、森林伐採をめぐる、現地住民と政府や伐採業者との間にトラブルを生じているケースは枚挙に暇がない位だし、何も途上国だけでなく、先進国においてもカナダのアルバータ地方の森林開発の例とか何をかくそう我が国においても、大規模林道建設やリゾート開発等、トラブっているケースは無数にあるのだから、いったいこれらの事象をどう受けとめたらよいかと、正直な話とまどった。



◆先住民との協調

だが私のとまどいとは無関係に、参加の重要性を訴える声は更にエスカレートしていった。最終日の夜に採択されたIPFへの報告の中にも盛り込まれたことだが、森林経営に関する現地住民の参加は、計画立案の初期の段階から、途中での討議、計画決定、計画の実施、実施後のモニタリングやフィードバックに至るすべての段階で認められるべきだということが、多くの発言者により強調された。

また性別、職業、教育程度によって差別されることなく、広範な関係者の全き参加を求める声も圧倒的であった。

更にこの論調は他のテーマにも飛び火していった。森林開発計画対象地に住む

少数の先住民との協調である。たとえ彼等が森林の多目的開発に反対であろうとも、とにかく参加を求めることが必要であるという主張、更に一步すすめて、ノウハウというテーマとのリンケージとして、彼等が有している森林に関する地域的な知識（カナダの発言者の説明では、どこにブルーベリーの実がなっているというようなことも含まれるのだそうだ）。及び森林利用に関する伝統的体験を充分取り入れて行くべきだという主張である

◆先住民参加への異論

しかしその一方で、当然異論も出た。インドネシア、マレーシア、一部のアフリカの参加者からである。特にインドネシアの上級フォレストラーの人は、繰り返し反論していた。

彼等があげた表向きの反対理由は、彼等の国では教育レベルが非常に低く、ことに先住民は識字率さえ極端に低くて、参加を求めようにも、その意義を理解させることすら困難だということで、だから、その地域の宗教上の指導者の了解を取りつけば事は足りるというケースが多いとのことだった。

これらの発言の裏には、各発言者の国の抱える諸事情、特にサラワクやPNGのように、熱帯雨林の伐採を進める政府及び大資本伐採業者と、伐採に反対する先住民との間で、激しい衝突が長年続いている現実が、大きく影響しているであろうことは否めない。

しかしそのトラブルを正面から取り上げ、参加の問題をリンクさせる発言は全く出てこなかった。

◆焼畑移動耕作に対する評価

以上の論議に関連して、私は、参加とノウハウのリンケージという視点から、先住民が長年行なって来た焼畑移動耕作もまた先住民の伝統的ノウハウとして認め尊重していくのかどうかを考えるべきだと主張した。更に焼畑耕作こそ賢明な持続的森林利用法の見本だという評価に対し、焼畑こそ熱帯林減少の最大の元凶だとするもっともらしい反論が最近みかけられるが、この反論が正しければ、1960年代以降の大規模木材資本による伐採が始まる前に熱帯林は消滅していた筈であって、この言い分の真偽を調査研究の中で取り上げるべきであり、それが持続可能な森林管理の第一歩ではないかと提言した。しかし議長もシンセサイザーも全く無反応であった。これが先に述べたNGO発言に対する差別の一例である。

◆取り残される日本

違った意味で印象的だったのは、白熱した会場の空気とは逆に、日本からの参加者の発言の低調さであった。主催国ということで官民合わせて最多の出席者があったが、発言も少なく、その内容も私が出たサブセッションや小委員会では、技術者の参加をより多く求めるべきだとか、技術者の意見や研究成果をもっと活用すべきだとか、技術畑の一般論ばかりで具体性に欠け迫りもなかった。

森林の持続的管理問題の対象は、かつての熱帯林だけから温帯林へまで拡大している現在、カナダ材、広葉樹を含むアメリカ材、北洋材の占めるポジションは

重大である。

そうしたシフトの中で、1世紀に及ぶ大規模温帯造林の経験を持つ日本のノウハウが、諸外国から期待されていることが、今度の会議で窺われた。殊に単一樹種一斉造林の繰り返しが地力に及ぼす影響については然りであった。しかしそれに応える日本林業からの発言は、結局出ずじまいであった。

◆環境抜きの論議

環境NGOとして参加した立場から言うところ、熱心な議論の割には、内容は不満足なものであった。

ひとつには、生態学的な森林の価値評価の欠落である。そもそもこの会議の発端となったリオサミット自体が、環境サミットと位置づけられていたのだから、実務者レベルのこの会議でも、森林がもたらす地球規模の恩恵の認識と、それへの対応が先ず論議されて然るべきであったのに、殆どが森林を木材や林産物資源のソースとして捉えただけの論議に終始し、森林の生態学的機能や生物多様性の維持という視点からの論議は、出て来ずじまいであった。

ふたつめは、上記の認識に立った林業の基盤造りの第一歩として、環境林と商業林のゾーニングを行なうべきだという論議も出なかったことである。この点はサブセッションでの討論の最初に私が提案したのだが、これも無反応であった。

3番目として、前2項を敷衍することなのだが、近年世界中で問題化してきた多様性に富む原生林を皆伐し、跡地にユーカリ等の超短伐期の早生樹種を植林す

ることへの疑問である。これは森林生態系を根こそぎ変えてしまい、次の皆伐までの数年間、単に「そこに木がある」というだけの貧弱な生物相が一時的に出現するにすぎない。

そのうえ地力も急速に低下するのだがそれをしも『持続的林業経営』と呼ぶのかという議論は、私が疑問を提起した以外に、誰も問題としなかった。

◆むすび

最後に強調しておきたいのは、森林資源大国でありながら、世界最大の木材輸入国である日本の立場というものが、全く見えて来なかったことと、持続可能な森林経営と言っても、物理的、植物学的に生産量は限界があるという思考の欠落という点である。

生産と消費はお互いがそれぞれの誘発と制限の最大要因である。いかにバイオテクノロジー技術が進歩しても、植物生産量に限界がある以上、林産物消費量はそれに応じて限界がきめられ、計画されるべきである。だから、持続可能な森林経営計画は、同時に持続可能な木材消費計画を伴うべきであろう。

私は第2日目の全体会議でそのことを強調したのだが、顧みられなかった。しかし、このことは、CSDとSFMにおける基本命題だと、私は信じている。

今後、この議論が拡がって行くことを願って報告を終わる。



▲猪俣 栄一氏

～山からの便り～ 『くまの熊野から……』

【冬の編】

●中村 義明
Yoshiaki Nakamura

◆冬の仕事、“伐り”と“出し”

盆まで隣の本宮町の森林組合で働いていた私が、盆明けから地元の熊野川町篠尾の山で“山ぶと”として働くようになって3か月余りになった。

季節も夏から秋、秋から冬へと移ってきた。“山ぶと”になって最初の仕事は、これから伐採する山の下刈りだった。ちょうどその仕事をしている時に、『ウータン』の永田さんがひょっこり訪ねてこられた訳である。

伐採にかかる山の下刈りは、その後の地あられ（伐出したあとの山を枝などを片付けて植林しやすいように地ごしらえすること）の作業をやりやすくするために行う。

下刈りは、先輩の“山ぶと”である64歳の岡さんと二人で行った。下刈りを終えると、岡さんはすぐ隣の10年前に植林した山の下刈りに移った。私は、伐出を請け負った46歳の和田さんと“伐り”にかかった。伐採のことを、このあたりでは単に“伐り”という。

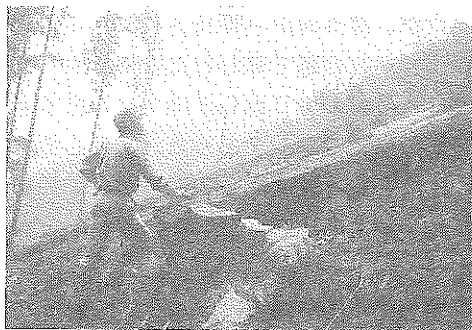
私は、“伐り”を3年前から始めたが、和田さんは10数年のベテランである。和田さんから大いに勉強させて頂こうと思う。

今回伐るのは、大正の初めの頃に植えられた80年生の木である。ほとんどが杉である。

篠尾の山は稜線が1000mあり、今回伐のも800-1000mにかけての山である。上の方が傾斜が緩やかで、下のほうが立っている。

植林する前は、大きなブナやナラやトチ、カンなどの広葉樹が多く繁っていたのであろう。上の方が土地が肥えていて木が大きく、下の方が痩せ土地で木が小さい。普通の山とは逆になっている。

大きな木は、一抱えよりかなり余る程の太さである。倒れる時の迫力はなかなかのものだ。上の方の太い木は、“伏せ込み”というやり方で伐った。“伏せ込み”というのは、木を山の上方向に倒すやり方で、倒したあと枝を払わずに1か月も2か月も置いておく。



▲伐採現場に立つ中村さん。

そうすると、葉から水分が蒸発して木が速く乾き、木の色も良くなる。また軽くなるので、“出し”（出材のことを単に出しという）の仕事がやりやすくなる。しかし、“伏せ込み”は倒した木がとまらずに滑り落ちてくる可能性があり、危険性も大きい。

◆あつ、危ない！！

今回、伐出する山は林道の上下に跨がっているの、上と下と別に架線を架設して出すことにする。道上の“伐り”を終えると架設にかかった。

“出し”も“伐り”と同様危険な仕事である。“出し”は、本宮町森林組合ではほんの少しやっただけである。今回はほとんどの作業を和田さんと二人でやったので、大勢でやる場合より仕事を覚えるのが早い。

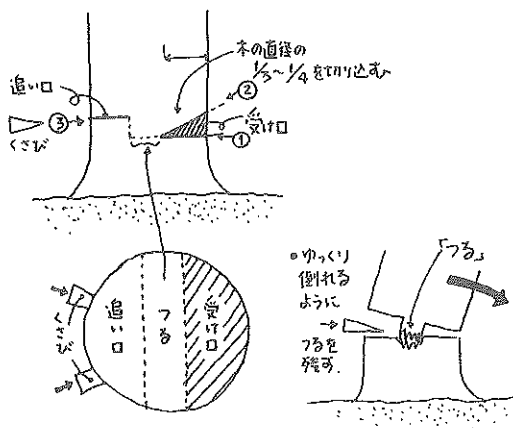
架線ができるといよいよ“出し”にかかる。和田さんが土場で機会を運転し、私が山で“とんがけ”をする。“とんがけ”は、伐った木にワイヤーをかけて吊り上げて土場まで出せるようにするのだ。

吊り上げた木が思わぬ動きをすることももあり、ワイヤーが切れることもあって、なかなか危ない作業だ。木がどのような動きをするか予想して安全な場所に退避しなければなら

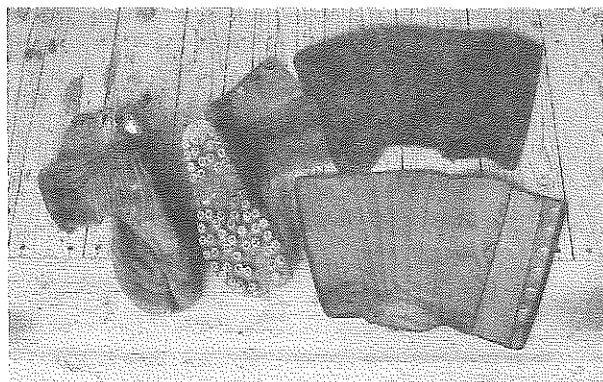
ない。私も一度まかり間違えば大怪我をするような目に遭った。木が振り廻ってきても十分交わっていると自分では思っていたが、なにせ木が大きくて長い。あっと思う間もなく振ってきた木に胸をはたかれた。

しまったと思った。倒れたまま痛みをこらえながら脚を見ると、骨は折れていないようだ。息が詰まったような状態で動けない。和田さんが下から「大丈夫か」と叫びながら上ってきた。

さいわい打撲と擦り傷だけで、しばらく休むと痛いながらも動けるようになった。どうにか痛む脚を引きずりながら、その一日仕事ができた。神様のお守りを頂いたのだ、これくらいで済んで良かった、有難いと思った。和田さんと「お祓いのお陰やなあ」と話し合った。



▼ 山仕事に欠かせないスパイク地下たば(左)、臍かん(右)



◆ 良き仲間で、良き仕事

山入りの時に、和田さんは和田さんと同じ熊野川町小口に住む修験道の和尚さんにお祓いしてもらった。立石さんという和尚さんは、東京から熊野に移り住んで10年になる。

立石さんはこの秋、和田さんの助力を得て、間伐材でログハウスの護摩堂を建てた。11月17日には盛大に落慶法要が営まれ、それまで普来庵という私的なお寺であったが、普来山正覚院となり、彼はその住職となったのである。吉野から大峰山を越え、熊野に至る奥駈道の終点に修験のお寺が出来たことになる。

11月7日は山の祭りで、この日は山仕事も休んで山の神を祭り、御馳走を頂く。私たちも立石さんに山まで来て頂いて護摩を焚いてもらった。

お祓いのお陰で、その後も何度か危ないことがあったが、無事に仕事は進んでいる。人手がもっと必要となり、今では73歳の古根川さんに機械を運転してもらい、三人でやっている。和田さんの兄さん(56歳)が手伝いにくることもあり、精神薄弱者の施設で働いている天野君(34歳)も夜勤明けや休みの日に手伝いにくる。よき仲間が集い、よき仕事ができるのは有難いことだ。

◆ 国産材のゆくえは...

伐出した木は新宮市の原木市場へ運び、市にかける。

10月16日の記念市で、私たちの伐出した木はまずまずの良い値で売れた。その後も相場は良いようだ。消費税が上がる前に家建てようという動きや、円安で外材が値上がりしたことなどで、国産材が値上がりしてきたようだ。国産材の相場が良くなることは、私たち林業にたずさわる者にとって喜ばしいことだ。

しかし、何段階にも等級分けされたり、複雑な流通経路を通して、高いものになっているのではないかと疑問も感じる。また、土地政策と住宅政策の不在で、庶民が十分な広さを持ち快適で健康に暮らせる住宅を手に入れ

ることができない日本の住宅事情にも大いに憤りを感じる。

(このことについては早川和男さんの書かれた『住宅貧乏物語』を一読されたい)

◆「フィリピンへ植林に行こう」

山仕事の合間には、仕事と離れて山や川に遊ぶこともある。この夏は、本宮町の川湯温泉の上流にある大塔溪谷に遊び、釣りや水泳を楽しんだ。

宝龍の滝のある谷には大きなトチの木が何本もあった。熊野の山も杉や檜の植林地が多く、というより多過ぎ、もっと広葉樹の山を増やしたいと思うが、奥山にはまだまだ良い所が沢山ある。行き過ぎた人工造林をやめ、適地適木の森作り、山作りで豊かな森と山を取り戻したい。少しずつではあるが広葉樹を植える人が出てきている。私も山主に働きかけて、場所によっては広葉樹を植えていきたいと思う。



▲ 滝のせり



▲ 大きな杉の本の前で(まんゆう中村さん)

熊野川町の林業総合センターに熊野森林文化国際交流会とアジア協会・アジア友の会の事務所がある。坂本さんと松本さんのお二人が頑張っておられる。今年も9月から10月にかけてアジアから六人の研修生を招き、森林研修が行われた。今年で8年目になる。

私たちの山にも伐出作業の見学にこられた。松本さんは、教育委員会が開いている英会話教室の講師もしておられるが、そこでも研修生との交流があった。私もフィリピンから来たアーノルドを囲むグループに参加し、アーノルドからフィリピンの森林事情を聞くことができた。

「フィリピンでも植林を必要とする山が多いのに資金がない。」私たち日本人に協力してほしいという。

私は以前から砂漠の緑化に関心があり、去年は中国の内モンゴルの砂漠植林ボランティアに参加した。東南アジアについては『ウータン』などを通じて関心はあったが、実際にアーノルドの話を知ると東南アジアの植林もやらなければならないと思い、「皆でフィリピンの植林に行こう」と言ってしまった。出来るだけ

早い時期に実現したいと思う。

アーノルドは「フィリピンの熱帯雨林が植林を必要とする荒廃地になってしまったのは、政府が木を売ったからだ、買った日本の商社が悪い訳でない」と言ったが、そのまま受け取っていいものかどうか。今から私たちが出来ることは植林して森を蘇えらせることだ。

日本の抱えている巨額の外貨をこういうことにこそ大いに使って、緑豊かな自然を回復し、あらゆる生物が豊かに共生できる世界を実現したいものだ。

◆熊が出た！

今年の冬の訪れも早い。熊野の山々もひと冬に何度も雪が積もる。山仕事も厳しくつらい季節である。その冬の訪れを前にとんだ訪問者が篠尾の村にやってきた。熊である。

私の家のすぐ近くの大山さんは、和蜜蜂を沢山飼っているが、その蜜うと（巣箱）がやられたのである。山では熊の爪跡が木についているのを見たりした人もあるが、里に出たのは70代の人でも今までなかったことだという。熊が里まで出てきたのも、山に食物が少ないからだろうか。山にもっと広葉樹を増やしたいものだ。

熊は仕掛けられた檻にはかからずに、どこかへ行ってしまい、熊騒動はお終いになった。

◆村の祭り

12月1日は篠尾の氏神様のお祭りだった。当日は朝から冷たい風が吹き荒れ、雪が横なぐりに降りつけた。

今年のお祭りに、私たちは京都から一人芝居の人形劇をやる友人を呼び、祭礼のあと人形劇を上演した。昔は青年団が芝居をしたりして賑わったそうだが、高齢化とともに芝居もなくなり、祭礼のあと御供まき（餅まき）をしてお終いとなっていた。何か楽しいことをやりたいと思い、人形劇の上演となった訳だ。

観客の中にこどもは数人だけであったが、年配のおじさん、おばさんたちもこどもに選

ったように熱心に見入っていた。これからも楽しいことをどんどんやっていきたいと思う。

◆木を植えることから....

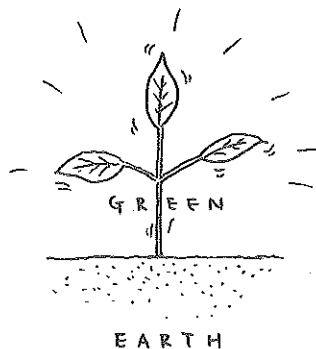
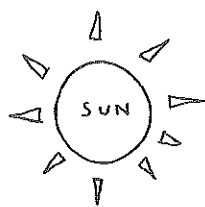
祭りの夜も雪は降り続き、翌朝は5cmほどの積雪となった。山は10cm位積もっただろう。山仕事はお休みとなった。

今回の伐出も半分位で、作業は年を越し、2月か3月頃までかかりそうだ。隣の山の下刈りを終えた岡さんは、すでに伐出の済んだ林道より上の部分を来春に植林できるように“地あらし”の作業にかかる。また何十年か先の伐期に向かって山作りが始まる。

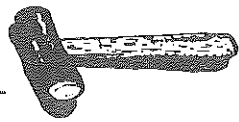
毎年春になると植林するのが楽しみである。一本の木を植えることから全てが始まるのだ。砂漠も熱帯雨林が伐採されたあとの荒廃地も、一本の木や草を植えることから始めるしかない。きっと緑は蘇える。

人間にとって本当のロマンは、自然の中にあるのではないだろうか。自然を離れて人間の豊かな暮らしや文化はないと思える。熊野の山は世界の森へ繋がっているのだ。

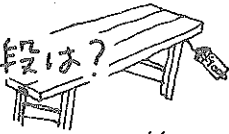
(つづく)



つくり手からの『家具』のお話



その3 家具の植段は?



私の少ない経験と知識の中からこの紙面を書き始めましたが、はたしてこれでいいんだろうかと思ったりしています。

それは外材とりわけ熱帯木材の使用を減らすためにはどうしたらいいのかが問題であって、そのほとんどに使われている市販のフレッシュ家具をどうにかせずに「皆さん別注家具を買いましょう。」と書いてみたところをテヘホあきません。

別注家具のいいのは誰もが認めるところですが、その植段がなかなか手が出ないのが現実です。

それだけ別注家具と市販のフレッシュ家具の植段の差は大きいのです。

それは材料代と製作日数に大きな違いがあるからです。(このことはいづれお話したいと思えます)

私もできるだけ植段を下げようとがんばっているのですが、いざせん手回がかかるのはどうしようもなく出来上がると自然と植段は高くなってしまいます。

では植段はこういう風につけるか、あくまで私の場合ということで話します。まず注文主とお話しし、必要なら家具を使われるところへ出向き寸法を測りだいたいスタイルを決めます。

次に図面を引き、部材の割り出しをします。(脚→50mm×50mm×700mmを4本とかいうように)

使う材を決め材木屋さんに注文する。板材として買うので歩止り(1枚から部

◎永田 健一 [別注家具制作・ZOO]

材がどれだけとれるか)を考え、1.3~1.5倍の板材を用意します。

材料代がいくらあとは製作代ですがこれが作っている人によって様々で、

材料代×3倍という人もいれば×4倍という人もいます。

私の場合はいままで作った経験からこの家具は何日かかると目安を出しその日数に日当をかけるのです。

だから始めの頃は大変でして高くなり安くなり矢張り失敗ばかりしていました。これが家具の植段となるのですが物によって、小物でも(引出しのついた箱物)2~3日以上かかることがあります。

これを上の計算をやるととんでもなく高い植段になるので同じ物をいくつかつくるかしていますが、赤字が出るのはいたしめないのが現実です。

ダイニングテーブルのように大きくてもさほど手回らないものもあります。

しかしテーブルの天板が一枚板となると植段はポンと上がりやす。

そうしてつけた植段は市販の家具の3~5倍となってくる訳でボロ儲けしていることはありません。

先日、ある知人の話で私のように個人で家具をつくっている北海道の人のことを聞きました。とてもいい家具で又安いらしいのです。何故そんな植段がとんとんと1日の生活費が安いとのこと。

つまりはここにつきるらしい……。

[つづく]



人間が好き

↑
長倉洋海 定価2,678円(税込)
アマゾン先住民からの伝言

◆絵本などで有名な
福音館書店より
11月に発刊。
120ページあまりの写真
からあふれ出すアマゾンの
人々の笑顔に思わず
心がほぐれるきれいな
写真集です。必見!!

福音館書店

長倉洋海(ながくら ひろみ)
1952年、徳島市生まれ。同志社大学法学部卒業後、時事通信社カメラマンを経て、現在、フリーのフォト・ジャーナリスト。主な写真集に「Dear Friend—紛争地の子どもたち」、「マヌード 愛しの大地アファンジ」、「南アフリカ」などがある。日本写真家協会新人賞(1983年)、土門拳賞(1993年)などを受賞。

身近な

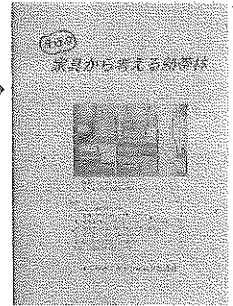
◆家具から考える熱帯林◆

発行：サラワク・キャンペーン委員会

TEL: 03-3378-1991 FAX: 03-3378-1990

〒151 東京都渋谷区代々木2-29-3 ふじの荘2階7号室

◆今までなかなかアツめなつた家具に
フケられている熱帯木材の量などを
サラワクキャンペーン委員会が調べ冊子に
してくれました。ぜひ活動資料として
活用して下さい。¥500です。ウータンにも置いてあります。



◆これは大人のための絵本

東京の熱帯森林保護

団体RFJの南ふらぐ

4年もの月日をかけ出来
上がったものです。

24のお話とキャンパスに
描かれた絵には圧倒
される。その使われている

色はジャングルから採
れた色です。

◆世界をささえる一本の木
ヴァンアール再話・絵/永田穂子訳
ブラジル・インディオの神話と伝説

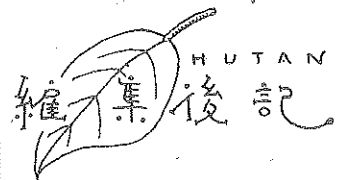
定価1,854円(税込)

福音館書店



ウータン活動報告

- 96・9・17 関西熱帯木材使用削減委員会(以下削減委と略)全体会議
- 9・28 削減委・家具部会
- 10・4 枝打族・反省会
- 10・6 地球環境ネットワーク関西・第3回学習会
- 10・12 削減委・自治体部会
- 10・15 削減委・全体会議
- 10・21 世界熱帯林週間に泉南市と話し合い。同市も「削減」と判明。
- 10・28 削減委・家具部会
- 10・29 削減委・自治体部会
- 11・8 削減委・全体会議
- 11・10 ウータン豊中「熱帯林講座」①先住民のゆくえ
講師・井上真さん(東京大)
- 11・17 削減委、中間報告会『森にやさしい暮らしを考える』
講演・有馬孝禮氏、自治体・家具・住宅部会からの報告
- 11・24 ウータン豊中「熱帯林講座」②ヤシは地球にやさしいか
講師・峠隆一さん(環境ライター)
- 12・1 地球環境ネットワーク関西・第4回学習会
- 12・2 削減委・全体会議



◆ウータンも結成はや
10年目、自分の年をとる
のも早いかな……まあよ
うやってますね。

ストックしてある「ウータン」
をながめているとその
瞬々のシゴウサゴさ
ザザザザザザザザザザ
ザザザザザザザザザザ
ザザザザザザザザザザ

どぞ来年もウータン
をよろしく! 願いは
会員サふえてほしい!!

(N)

HUTAN ACTION SCHEDULE



●'97 ウータン総会

【時】1月27日(日) 午後1時～4時

【場所】アピオ大阪 参加無料です。おこし下さい。

● 熱帯林連続講座は3, 4, 5月と行ないます。

内容予定/サラワク等熱帯材編
ロシア等針葉樹材編
国産材編

● ウータン10周年記念イベントは環境月間に

パーティなど予定

* 東京から転勤したので、視点をこの周辺に移し、環境-人権の問題にとり組んでゆきたいと考えております。粘り強い活動に敬意を表します。
朝日新聞佐久間通信局 田中洋一



* いつも通信をお送り下さりましてありがとうございます。41号を毎日新聞・環境部に送り、自治体キャンペーンの宣伝をしました。(中略) 埼玉では50自治体にアクションしました。 埼玉県 薄井久美子

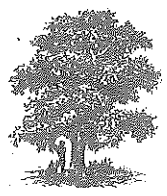
* 会報を読むくらいしかできないかもしれませんが、よろしくお願ひします。 羽曳野市 岩崎純子

* 通信・活動ごころうさまです。活動できるメンバーが少ないので、「地球人」としてはなかなか思うように動けませんが、若い人とやっている「グループひめじ発世界」で講演会を開いています。今年は青年会議所が市民活動のイベントを開くので、そこに参加して存在をアピールする予定です。 姫路市 グループ地球人(岡本昭子)

お便りの
ところ
字が小さ
くなって
スイマセン。
ガマンして
下さい。

* ウータンの活動は森をまもることになっているのでしょうか。私の現在の仕事が環境の技術を論じる職場なので、時々論議のすれに絶望的になっていたりします。

!!!!
前号でこんなご意見をいただきました。「ウータンの方法論に対する異議申し立て」と考えて、ご意見を投稿していただくようお願いしたところ、「環境問題がビジネスになっている職場の論議に違和感をもっているものであり、ウータンに絶望しているわけではない」とのことでした。早とちり、スイマセン!



【会費・カンパをいただいた方】(敬称略)

岩崎純子 薄井久美子 大西裕子 大野浩史 グループ地球人
上屋英男 西園良夫 西園千春 福田敦 宮澤朝子 渡辺裕文

【リサイクル封筒をいただいた方】

速原耕児

ありがとうございました!

ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】〒530 大阪市北区中崎西1-6-36

サクラビル新館308

「関西市民連合」気付

Tel.06-372-1561

【一部】300円 【年会費】3000円

【郵便振替】00930-4-3880



●購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

●ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。